Journal of Osaka Kawasaki
Rehabilitation University Vol.4. 2010.
pp.45-56

原　著

フランクルの「態度価値」について

The concept of Frankl's "attitudinal value"

雨宮　　徹

要約：拙論では、フランクルの「自己超越」（Selbsttranszendenz）の概念を軸として、彼の「態度価値」（Einstellungswert）の分析を行った。その価値の実現に苦悩が前提とされている点で「創造価値」（shöpferischer Wert）、「体験価値」（Erlebniswert）と異なるという点が確認された後、態度価値は内在的次元において自己超越の相関者を見出し実現される場合と、自己超越の相関者がなくとも、超意味の次元において実現される場合があることが考察された。そして後者においてこそ、態度価値は無限の実現可能性を持つことになることが確認された。

Key Words：フランクル、態度価値、自己超越、苦悩、超意味

はじめに

精神科医であり人生の意味についての思想家であったV.E.フランクル（1905－97）は、人間が意味を見出す場合の典型的なあり方を「創造価値」（shöpferischer Wert）「体験価値」（Erlebniswert）「態度価値」（Einstellungswert）の三つに分け、そのうちの態度価値にもっとも高い価値を置いている。他方で彼は、人間が意味を見出す際の基本構造を「自己超越」（Selbsttranszendenz）として記述している。拙論では、この自己超越の概念を軸にして態度価値を解釈、検討していくことを目的とする。具体的には以下のような考察を行う。

まず1においてフランクルが内在的次元において意味をどのように捉えていたかを概観し、そこで苦悩が人間の生に占めるその独特さについて確認すると同時に、態度価値の他の二つの価値との相違を確認する。次いで、2において、苦悩の意味について考えることが、世界全体の意味について考えることに繋がり、そこでは人間の思考の限界および存在の神秘に突き当たることが確認される。そして最後に、そのことを踏まえた上で、フランクルが積極的に超意味あるいは信仰について語ることの意義を確認し、ここからもう一度、態度価値について考察する。

1　内在的次元における人生の意味

内在的次元とは、存在者が存在する世界の内部のことである。まずは、この次元において、人生の意味がどのように実現されうるとフランクルが考えていたのかについて見て行きたい。

Tohru Amemiya
大阪河崎リハビリテーション大学
リハビリテーション学部
E-mail : amemiyat@kawasakigakuen.ac.jp

1-1　人生の意味への問いに関するコペルニクス的転回

まず、彼の意味の思想の根本を担う「人生の意味への問いに関するコペルニクス的転回」と呼ばれるものから見て行こう。

> もし我々が世界体験の根源的構造を熟慮しようとするならば、人生の意味についての問いに、ある種のコペルニクス的転回を与えなければならない。つまりそれは、人生それ自体が人間に問いを立てるものなのだ、ということだ。人間は問うべきなのではなくて、むしろ人生から問われているもの、人生に応答する（antworten）もの、人生の責任を負う（verantworten）べきものなのである。[1)]

まず簡単に言うならば、この「人生の意味に関するコペルニクス的転回」は、自己中心から「自己超越」への転回として捉えることができるだろう[2)]。フランクルによれば「自己超越は実存の本質」[3)]であり、「人間であるということは、常に自分以外の何か、あるいは誰かに向けられているということを意味している」[4)]。ここでは、反省的に捉えられた対象的自己ではなく、対象化する作用そのものとして、自己が理解されている。したがって自己とは、世界の中に、他の存在者と並び立つような仕方で存在するものなのではなく、世界が立ち現れる「ここ」（da）として理解されている。ところがこの自己超越性に反して、関心を反省によって捉えられた対象的自己に集中し、そこから世界と対峙するとき、人は世界に、この私を守り満足させるためにいったい何をしてくれるのか、と問いかけることになる。

しかし、人生から問いかけられていると気づくとき、つまり世界の側からの呼びかけに耳が傾けられるとき、その人の関心は自己にではなく、世界に向けられている。そして世界の側、人生の側から他ならぬこの私に問いが向けられているということは、他ならぬこの私がここに存在する意味が生じることになる。以後、拙論では、人生の意味に関するコペルニクス的転回を経た後の、この世界と人間の関係を「呼びかけ－応答関係」と呼ぶことにする。

さて、上に見られるように、人生が発する問いを聴き取った人間には、その問いに応答する責任が生じると言われる。ここで生じる疑問は、人生から問いが発せられるというのがどういった事態であるのかということ、そしてその問いを聴き取る者に生じる責任とはどういったものか、ということである。

ここで注意しなければならないのは「責任を負う」という日本語の場合、「責めを負う」という意味があり、基本的にはある種の負担を強いられるというニュアンスがつきまとうという点である。その語感のまま「verantworten」（責任を負う）を理解しようとすると、フランクルの言わんとしていることからずれてしまうように思われる。なぜなら先に見たように、彼においては「verantworten」が「antworten」（応答する）を内に含むということが強調され、呼びかけに対する人間の応答として理解されているからである。

したがってこの呼びかけは応答する者にとって、自己を自ずと棒げたくなるような、積極的なものとして立ち現れなければならないように思われる。もしそうでなければ、呼びかけに応答するというその関係のうちに、生きる力が芽生えるとは考えにくいからである。もしそこで果たされる責任が、責めを負うという意味でのそれにとどまるならば、責任を果たす人間が成し遂げるのは、自己を否定されないように守る行為、欠落を埋めるという消極的行為にとどまってしまうだろう。

こうした観点から、フランクルが挙げる三つ

の価値に具体的に即しつつ、論者なりの分析と解釈を示してみたい。そしてその中で、意味と苦悩の関係がどうなっているのかを明らかにしていきたい。

1-2　三つの価値

フランクルにおいて「価値」という語は、人生の意味の類型として用いられ[5]、「創造価値」、「体験価値」、「態度価値」の三つに分類される。まず、創造価値と体験価値について確認し、次に態度価値について見てみたい。

1-2-1　創造価値と体験価値

創造価値は「私たちが何かを創造すること、つまり、私たちが何らかの仕方で世界を形成する」ことによって生じるものと定義される[6]。また体験価値は「私たちが世界を体験すること、つまり、私たちの内面が存在の美や真理によって貫かれること」[7]によって生じるものであると定義される。両者は、自己超越する対象が異なってはいても「呼びかけ―応答関係」という点においては同一の構造を見て取ることができる。ではまず、創造価値から見ていこう。

何かの創作に没頭するとき、そこでわれわれを突き動かすものは、まだ現実には存在していない、創り出されるべき対象のヴィジョンである。たとえば画家が一心不乱にキャンバスの上に絵筆を走らせているとき、彼の念頭にはあるヴィジョンがあり、それを絵画として表現すべく努力がなされる。もしそうしたヴィジョンがなければ、そもそも絵筆を動かすこともできないだろう。こうしたヴィジョンが存在するということは、どのような素人であっても自分の完成した絵に対して、満足や不満足を感じる、という点からも明らかである。なぜならそのように感じられるためには、必ずその基準となるものがなければならず、それが、まだ現実には存在していない、創り出されるべき対象のヴィジョンだと考えることができるからである。

さて、それでは創造行為において、人生から問いかけられるというのはどういった事態を指し示しているのだろうか。創作の場面で人の心にはさまざまな想念が去来する。多くのものはただ過ぎ去るに任されるが、それらは私を惹きつけることがないからである。それに対して、逃げ去らないように捕まえて手元に留めておきたいと感じられるものもある。それはこちらがそのように感じると言うこともできるが、逆にそのように感じさせられていると言うこともできる。これはヴィジョンに捉えられると表現することができるだろう。そうして捉えられたならば、われわれはそれを表現し、実現したいと強く感ぜざるをえない。つまり創り出されるべき対象のヴィジョンと出会うことにより、われわれは創造行為へと導かれることになるのである。

ここに呼びかけが成立するということができるだろう。なぜならば、あるヴィジョンの魅力に捉えられるということは、そのヴィジョンが自らを、創造行為を通して実現するよう、この私に問いかけ、迫ってきていると言い換えることができるからだ。そのヴィジョンに忠実であろうとすればするほど、創造行為には困難が伴い、相当の努力を強いられることになる。われわれは努力を放棄したくなる一方で、ヴィジョンが損なわれることなく、そのままの姿で実現されることを、やはり望んでもいる。呼びかけられた者に責任（Ver-antwortung）が生じるというのは、つまり応答（antworten）せざるをえないのは、そもそもそれを自己が望ましいもの、良いものとして感じているからなのだ。そして「呼びかけ－応答」関係における「呼びかけ」は、自己の外部に、自己の応答に先行して成立する。そうでなければ、人間は自己を超越することはできないからである。したがってこのヴィジョンについて私が望ましいと感じるその内

実は、自己の単なる願望から生じるものではなく、自己を超えたところからやって来るのだと言うことができる。

ほぼ同様の構造が体験価値においても成立している。桜の花の美に打たれる場面について考えみた場合、本当に桜を美しいと感じているとき、それにわれわれは心を奪われる。心を奪われるというのは、他のものが目に入らず、何よりも対象的自己に顧慮するあり方から離れ、桜のみが「ここ」に立ち現れている状態のことである。すなわちこれは、桜そのものに自己超越している状態であると言うことができる。ここでも創造価値のところで見たのと同じように、自己は桜に惹きつけられている。創造価値と異なるのは、自己を惹きつけるものがそこでは未だに実現されていないヴィジョンであったのに対し、体験価値においては現に存在するものである、という点である。そしてここでも同様に、桜の美しさに惹きつけられる者にも問いが聴こえ、責任が生じることになる。なぜなら何かが美しいと感じられるということは、それが自己において顕現すべきであり、それを妨げるべきではない、ということを意味しているからである。したがって、桜の美しさに気づいていながらその前を素通りしたり、あるいは桜の美しさを損ねるような行いをしたりすることは、桜の問いかけに反することになり、そうしたことをしないことが応答となるのである[8]。

1-2-2　態度価値と苦悩

次に態度価値について見てみよう。「最後の、価値実現の第三の可能性は、苦悩する（leiden）こと、つまり、存在に耐える（erleiden）こと、運命に耐えることにある」[9]と定義される。避けられない運命を受け入れ、それに対して毅然とした態度を取ることによって実現されるもの、さまざまな外的な制約によって、価値実現の可能性がどれほど狭められたとしても最後に残されるもの、それが態度価値である。この価値は、他の二つの価値よりも高いとされるが、その理由は「創造も体験も、その価値可能性は限られ、汲み尽くされもするだろう。だが苦悩を意味で満たす可能性は無限である」[10]からとされる。

態度価値が他の二つの価値と異なるのは、それが問われる場面においては、必ず苦悩が伴うという点である。「創造や喜びのうちにおいてばかりではなく、また苦悩においてすら人生は充たされるのである」[11]。

創造価値や体験価値においては、先に見たように、自己超越をする対象が明確である。そしてその対象の顕現には、基本的に充実感や喜びが伴う。もちろん、それらの実現には実際問題として様々な紆余曲折があり、その意味で苦しみが伴うこともあるだろう。けれどもこの場合、苦しみはあくまでも付帯的なものであって、両者の価値を実現するための必然的な条件になっているわけではない。それに対して、態度価値は、自己超越する対象が必ずしも明確ではないという状態を引き受けるという仕方で、言い換えれば、苦悩を引き受けるという仕方で、実現される。つまり苦悩の只中にいる人間が実現する価値が態度価値なのであり、妙な言い方になるが、この価値の実現には、原理的に苦悩が不可欠なのである。

人生の意味への問いに関するコペルニクス的転回のところで見たように、基本的にフランクルは、苦悩がもたらされるのは、人が自己超越的本性から離れているときであると考えている。つまりこれは、世界観の問題、あるいは決断の問題として考えられている。彼の著作の中でさまざまな苦悩の有り様が述べられているが、どれも基本的にはこの構図によって説明することができると思われる。

たとえば、どれほど環境にめぐまれていても、自己中心性から離れないが故に生じる「実存的空虚」（existentielles Vakuum）[12]、それまで自分

を支えていた関係性が消失してしまったにも関わらず、そこに固着してしまい、他の世界からの呼びかけが聴こえなくなってしまう「偶像化」（Vergötzen）[13]、自己の快楽のために苦悩を求めるマゾヒズム、自分自身への同情の中に逃げ込む自閉的な苦悩[14]など、これらはどれも、「呼びかけ－応答」という関係の消失であると理解することができる。もっと踏み込んで言うならば、「呼びかけ」が存在しているのに、それを見出すことができない認識の錯誤に陥っている状態、あるいは呼びかけに応じようとしない不決断の状態であると述べることができるだろう。したがってこれらは、世界からの呼びかけに耳を傾け、それに誠実に応答することによって、克服されうることになるはずである。

けれども、「呼びかけ－応答関係」が、外的な要因によって制約されることがありうる。たとえばそれは、強制収容所という、あまりにも圧倒的であまりにも理不尽な暴力にさらされる場合である[15]。一方的に理由もなく殴打され、飢え、凍えるといった体験は、苦悩をもたらしこそするが、それ自体として喜びをもたらしはしない。つまりその体験自体から意味を見出すことは不可能である。いったい誰が、私を気まぐれに殴打する相手の存在に惹き付けられ、自己超越することができるだろうか。仲間がボロクズのようになって死んでいく光景に、誰が美を見出し感動することができるだろうか。

そもそも、われわれが生きているあいだ、喜びに満たされ続けるということはありえないだろう。創造価値や体験価値を実現することはもちろん可能だが、それらにおいて生じる出会いが常に続くわけではなく、強制収容所ほどではないにしても、それらを制約するような出来事やいわれのない暴力を受けたりすることは、いくらでも起こりうる。人間の生は、苦悩が基本になっており、もし苦悩の状態にあっては人生を有意味にすることができないというのならば、ほとんどの人間の、人生の大部分において、生きることが無意味になってしまうだろう。フランクルは人間を定義して「人間存在は最深かつ最終的に受苦であり、人間の本質とは、苦悩する者、すなわち苦悩人（Homo patiens）である」[16]と言っているが、そのような人間存在においてなおかつ意味を成立させせうるのが、態度価値なのである。

たとえば、フランクルは人生の意味への問いに関するコペルニクス的転回の例として、強制収容所で絶望していた二人の人物の話をしている[17]。二人とも、強制収容所という極限状態の中で「もはや人生に何ものも期待できない」と言い、すっかり絶望してしまう。これは、強制収容所での体験という不可避の苦悩に曝される中、先の例で言えば、ある種の偶像化が生じたのだと解釈することができる。すなわち、彼らはそれまでの平穏無事な生活の中で意味や価値を実現して来たようには、強制収容所の中ではまったく実現できないということを痛感し、このような状況にあってはもはや、人生に何ものも期待できないと言ったのだ、ということである。おそらくこれは、単純に自己中心性の発露であると言うことはできないだろう。なぜなら、以前に「呼びかけ－応答関係」が成立していたならば、少なくともその時点では、自己超越的に世界と関係を結んでいることになるからである。しかし、もとは「呼びかけ－応答関係」であったとしても、今や失われてしまった関係性に執着するということは、今・ここで、目の前で自分に呼びかけてくる自己以外の何者かとの関係を見失わせることになってしまう。つまり過去の「呼びかけ－応答関係」に閉塞することにより、現在の「自分以外の何か、あるいは誰か」からの「呼びかけ－応答関係」へと参入できなくなってしまう。

そこでフランクルは、今すぐに実現できるわ

けではないが、それでも彼らを待っている事柄を強く意識させることによって、この二人が絶望状態から抜け出る手助けをする。一人の人物は、未完成のままになっている科学書が待っていることを、もう一人の人物は愛する子どもが外国で彼の帰りを待っていることを思い出す。強制収容所という環境では、もちろん、科学書を執筆することもできなければ、愛する子どもと直接的なやり取りをすることもできない。したがって、直接的にいま・ここで創造価値や体験価値を実現することはできない。それでも、創造すべきヴィジョンあるいは愛する存在からの呼びかけが再び聴こえた彼らには、強制収容所という環境の中に直接的な自己超越の対象を見出すことはできなくとも、そうした状況に耐え抜く責任が生じる。こうして、自分の力ではもはや作り替えることのできない外的な運命を主体的に耐え抜くことにより、態度価値を実現させるのである[18]。フランクルは苦悩を意味あるものとして生きるための根本構造を、次のように述べている。

> 苦悩を志向し、有意味に苦悩することができるのは、何かのため、誰かのために苦悩するときだけである。つまり、苦悩は、意味で満たされるためには、自己目的であってはならない。自己目的になった途端に、どんな苦悩への覚悟、犠牲への覚悟もすべてマゾヒズムに転化してしまうだろう。意味に満ちた苦悩とは、「何々のための」苦悩なのである。私たちは苦悩を受容することによって、苦悩を志向するだけではなく苦悩を通り抜けて、苦悩と同一ではない何かを志向する。私たちは苦悩を超越するのである。[19]

自分のために苦しむ時、人は苦悩から抜け出ることはできなかった。自己以外の何か、あるいは誰かからの呼びかけに応答することによって、つまり創造価値や体験価値を実現することによって、苦悩を突き抜け、喜びに満たされることになる。だが、創造価値や体験価値を実現しなくとも、人生を意味あるものにできる道が残されている。それは苦悩を苦悩のままに引き受け肯定する道、つまり態度価値を実現する道である。ただしその場合であっても、苦悩に耐えることが自分以外の何かあるいは誰かのためになっていなければならない。自分の苦しみが何のためにもならないとき、人はその苦悩を有意味だとは感じられない。それ自体としては理不尽だとしか感じられない諸々の他者や出来事がもたらす苦悩であっても、それに耐え抜くことが自分以外の何か、あるいは誰かのためになっているのだと理解できるとき、人は苦悩に翻弄されるのではなく､それを自らに引き受け､それを積極的に生きることが可能となるのである。

2　超意味

2-1　運命がもたらす苦悩と世界全体の意味

さて、以上に見て来たのは、存在者が存在する世界の内部で、人間が意味を体験する場合の構造についてであった。つまりこれは内在的次元における意味の成立の話である。もし、人が自分はいま、問われていると深く感じることができるならば、自分がいま・ここにこうして生きていることに意味を見出すことができるはずである。そしてフランクルは実際、人間が生きていくのに、こうしたあり方で十分だとも考えている。けれども、彼はまた別の問い方も可能であると言う。

> けれども、意味への根源的な問いが、世界の全体に関わるときには、とりわけ、私たちの身に起こり、私たちが出くわし、受けるいわれがなくても避けられない運

命に関わるときには、それに異なる転回を与えることもできるということ、それを違う仕方で考えることもできるということを、終わりにのぞんで忘れてはならない。…この正真正銘の運命それ自体に、そしてその運命だけではなく、さらにこの世界の出来事全体に意味があるとは考えられないだろうか。[20)]

なぜ、世界全体の意味が問題にならざるをえないのだろうか。ここで注意が行くのは「世界の全体」が「とりわけ、私たちの身に起こり、私たちが出くわし、受けるいわれがなくても避けられない運命」と言い換えられている点である。では、避けられない運命の意味について考えるとき、なぜ、世界全体の意味が問題になるのだろうか。

先に見た態度価値において、自己に降りかかり苦悩をもたらす運命を意味あるものとしうるのは、それを受け入れ、毅然とした態度を取ることによってである、とされていた。ただし、態度価値が成立するのは、それに耐えることが自分以外の何か、あるいは誰かのためになるとき、すなわち、苦悩に耐えるだけの意味を持つような、自己超越の相関者が他に存在するときであった。例として見た二人の人物の場合、強制収容所の外部に存していた、自分を待っている仕事や愛する人間との関係において初めて、強制収容所という運命が引き起こす苦悩を引き受けることができた。したがってこれは、自己が運命それ自体を意味あるものとして、そこに関わることはできない、ということでもある。

そうだとするならば、強制収容所にあって、自分を待っている仕事も人間もない者にとっては、運命はどのようなものとなるのだろうか。そうした者にとって、運命はもはや世界の出来事の一部ではありえなくなるだろう。なぜなら運命は、自分の苦悩を捧げるべき何ものかを見出すことができる者にとっては、たとえどれほど圧倒的であったとしても、自己超越の相関者との関係の中に組み込まれうる、世界の出来事の一部となるのに対して、自分の苦悩を捧げるべき何ものもこの世界の内部に見出せない者にとっては、そのまま世界の出来事の全体を占めることになるからである。こうして今や、運命そのものの意味について考えることは、世界全体の意味について考えることと同義となる。

このように苦悩する者は、この世界全体のまったくの意味のなさに打ちひしがれ、完全なニヒリズムに陥るかもしれない。あるいは、この世界の外側に自己超越の相関者を見出すことによって、内在的次元における無意味さを一挙に解消しようとする、つまり、超越者への信仰に基づいて、一見まったく意味を見出すことのできない苦しいばかりのこの人生の全体を、意味あるものとしようとするかもしれない。

ところが、この世界の全体の意味について考えるということは、そもそも原理的に不可能である。そのことについてフランクルは次のように述べている。

意味への問いは、それが全体に向かうや否や挫折する。というのは、全体はそれこそ見渡すことができず、そのために全体の意味は私たちの把握能力を超えているからである。[21)]

もし、自己が世界の全体の意味を理解することができるとするならば、そのとき、暗黙のうちに、世界の全体に境界を引き、世界の外を前提としていることになる。

だが、そのような仕方で世界の「外」を立てるとき、外の世界も「ある」ものとして思惟せざるをえなくなる。これは人間の思惟には「ある」ものについてしか及ばないという制限が課せられているからであるが、しかしこの世界全

体の外とは、存在の世界の外ということになり、存在に対立する無を「ある」ものとして思惟してしまうという矛盾に陥らざるをえなくなる。つまり、人間の思惟にとっては、存在の世界の限界を見い出すことはできず、よってその全体を把捉することはできないのである。

こうした事態に直面したとき、人間は論理的に全く同等であるところの二つの可能性に直面しているのだと、フランクルは述べている[22)]。ひとつは、世界全体はまったく無意味であるとする可能性、そしてもうひとつは世界全体には人間が捉えきれないほどに意味があるとする、「超意味」の可能性である。世界全体の意味が人間には原理的に把握することができないのであるから、どちらの可能性についても、反駁もできないし、証明もできない。したがって、ここから先は論理的に決定することはできず、実存的な決断になるのだとされる。フランクルは超意味の立場を積極的に採るのだが、しかし、実存的な決断なのだと言うその場合、われわれは何を選び取り、何に向かって決断することになるのだろうか。

2-2　存在の神秘

一方で世界全体が無意味であるというときに、そこで世界の全体が空中にぽっかり浮かび、それと関わりそれを支える何ものもない、というイメージを思い浮かべているならば、それは誤謬である。また一方で、世界全体が超意味を持つと言うときに、人間には認識できない何かが世界全体と関わり、それを支えているというならば、それもまた誤謬である。というのも、どちらの想定がなされているときにも、すでにわれわれは存在の世界の全体に境界線を引いているからである[23)]。それは、存在の世界そのものの、そして同時に、存在の対立者としての無の存在化である。だが、存在そのものは存在者ではないし、無も存在者ではない。したがって、実存的な決断の選択肢として示されたこの二つの可能性は、そもそも成立し得ないように思われる。

では、世界の全体が見渡せないという事態に突き当たったとき、本来、見出されるはずの事態とは、どういった事柄なのだろうか。われわれは、この世界に存在し、その世界において、意味のあるなしに右往左往し、悲喜こもごもの生活を送っている。けれども、そうした存在の世界を全体として考えようとしても、世界そのものは意味という枠に当てはめることができず、その範疇を越えている。そこにおいて意味が成立する存在の世界そのものが意味を越えているということは、意味も無意味も、その根底に至れば意味を越えてしまっている、ということになる。

このことに気付くとき、人は、この世界には常に意味がなければならないという、強迫的な思いから解放される。われわれは通常、意味／無意味という範疇で生きており、そこから完全に離れることはないように思われるが、それだけではなく、意味というものを意識的に追求しはじめると、いつしか意味がなければならない、無意味な状態は回避しなければならないという、強迫的な思いを抱くようになる。けれども、世界そのものは意味を超えている、ということに気付くとき、そこから解放される。ただし解放された結果、意味も無意味もなく生きるのではなく、執着せずに、意味充足に喜びを覚え、無意味に苦しむということになる。言い換えるならば、世界の超意味性に気付こうが気付くまいが、結局、人は意味を求め、無意味を避けることに変わりはないが、それでも違うのは、意味がなければならない、無意味であってはならないという思いから解放され、意味を感じるときには喜び、無意味であると感じるときには苦しむということに、ただなるのだということである。

2-3　逆説としての信仰

では、フランクルが超意味の立場を積極的に語るときには、存在化しえないものを存在化してしまうという過ちがなされているのだろうか。もし、フランクルが語る信仰というものが、存在化された外部世界を想定しているのであるならば、それは、人間を安心させるための架空の物語にすぎないことになってしまうだろう。しかしながら、フランクルは決して単純に世界の外部を想定しているわけではない。たとえば、彼は神との関係にある人間を被造物として理解することは、存在的なものの内部でのみ通用する因果律というカテゴリーを、存在論的な領域へ持ち込むという過ちを犯しているのだ、と述べている[24)]。つまり彼は、あくまでも世界全体の理解不可能性を鋭く意識しながら、超意味や信仰について語っていると考えることができる。

彼は宗教的人間がどのように自己を理解しているかについて、以下のように述べている。

> 宗教的な自己理解において、人間は自分が絶対的なものに、言い換えれば、本来的には《関係しえないもの》に関係付けられている、ということを体験する。われわれはしかし、このパラドックスに驚くには及ばない。この関係し得ないものに関係付けられているということは、守護性（Geborgenheit）以外の何であろうか。[25)]

悟性の立場において存在する何かを理解しようとするときには、必ず何らかの関係において理解される。たとえば、あるものは、時間的に先行する他のあるものから生じ、また空間的には必ずそのあるものに並び立つ他のあるものとの位置関係が成立している。けれども、存在の世界の全体、存在の世界そのものは、こうした理解を超えている。それは何かから生まれるわけでもないし何かを生み出すわけでもない。何かに支えられているわけでもなく、何かを支えることもない。つまり存在の世界そのものは、悟性によってはまったく得体の知れないものとして、立ち現れるのである。では、悟性において関係づけることができないからといって、われわれがそれとまったく無関係であるのかというと、そうではない。なぜなら、われわれはまさにそこで生き、それに生かされているからである。このようにして人は「本来的には《関係しえないもの》に関係付けられている、ということを体験する」のである。

自己が自らの存在に安心を得ることができるのは、それを支える何ものかを見出す時である。したがって、自己は自己超越の相関者に呼びかけられ応答するという仕方で関係づけられるとき、自らがこの世界に存在する意味を見出すことができる。しかし、そうした関係そのものは、何とも関係をしていない。つまり関係の根拠の有無を超えて、それでも厳として関係は成立し、自己は世界のもとに存在している。この逆説性に気付くとき、人は自己と世界が存在することを当然だともみなさず、偶然だともみなさない。それでも私は確固として存在するということの奇跡性を、自らが守られており生かされているという守護性を、感じることになる。そこからより積極的に踏み込む一歩によって、つまり実存的な決断によって、超意味を信じるという生き方が選択されるのである。

では、超意味を信じるという生き方は、どのようなものとなるのだろうか。フランクルは非宗教的人間と宗教的人間との違いを、自らの生を「課題」（Aufgabe）として理解するのか、「委託」（Auftrag）として理解するのかに見ている[26)]。前者は、1で見たように、世界内での呼びかけに応答する生き方であり、後者はそれに加えて、そうした課題を委託する何者かを経験するのだという。その委託者とは神、すなわち絶対者で

あるが、この絶対者の理解も、先の奇跡性の感受に裏打ちされている。フランクルは、この世界の全体に意味があるのか、という問いに、もしすぐさま答えを返してくるなら、それは絶対者ではない、われわれが答えを持たないままでいるのは、まさにわれわれの問いが無限なるものに到達したからなのだ、と述べている[27)]。自己および世界が存在することの奇跡性を強く感受するとき、われわれが意味を見出して喜びを感じたり、あるいは喜びを見出せずに苦悩したりするすべてのことが、悟性によって把握しうるような根拠を持たないにもかかわらず、それでも存在しているのだというそのことによって、決して見出すことのできない、決して返答することのない、絶対的な委託者を信じるということが、可能となるのであろう。

2-4　再び、態度価値について

こうした深みにまで達して、初めて態度価値の無限の可能性が開かれることになるのだと考えられる。

もし、世界内の自己超越の相関者を俟って初めて、苦悩を受け入れることができるのだとするならば、それを見出すことができない者は、決して態度価値を実現することはできないことになる。つまり、態度価値の実現の可能性は創造価値や体験価値と同様に、制約されていることになってしまい、「価値可能性は無限である」とされていた態度価値の理解から遠く隔たってしまう。

あるいはまた、たとえば、前世の因果によってこの世の苦悩がもたらされているとか、あるいは乗り越えられる人にだけ神は試練をお与えになるといった言説によって、存在化された世界の外部との関係において現在の苦悩を意味付ける、といった仕方で態度価値が実現されるとするならば、それは存在化し得ないものを存在化するという誤謬を犯すと同時に、確証のない想像物を足場として、苦悩に意味を与えようとしていることになる。この想像物への信頼に揺るぎが無いあいだは、苦悩を引き受けることは可能であろう。けれども、自らの想像の根拠のなさに目を向けるとき、人は不安に襲われる。徹底して苦悩に打ちのめされ、呻吟しているとき、人はどこまで想像物を自らの足場とすることができるだろうか。苦悩が深ければ深いほど、自らの想像の根拠の無さを自覚せずにいられないのではないだろうか。そして、もしこの足場をもはや信じられなくなってしまったならば、またさらなる絶望へと陥ってしまうことになるだろう。

だが、フランクルが述べる態度価値は、こうしたことを指し示しているのではないだろう。世界の内部に自己超越の相関者を持たなければ成立しないわけでもなく、世界の外部に自己超越の相関者を持たなければならないわけでもない。そうではなくて、自己と世界が、この運命が、この苦悩が、意味も無意味もまったく超えた仕方で、それにも関わらず、現にこうして存在しているというその奇跡性を自覚するとき、苦悩を苦悩のまま肯定するということが、それを積極的に引き受けるということが、可能となる。苦悩は意味を持たないが、超意味を持つことになるのである。ここに至って初めて、態度価値はたとえどのような状況にあっても実現可能なのだという、その無限の可能性が開かれてくるのではないだろうか。

おわりに

筆者は、内在的次元において自己超越がなされれば、苦悩は雲散霧消し、人生の意味の問題のすべてが解決するのだという見解を、必ずしも自覚的ではないにせよ前提として、これまでずっとフランクルのテキストを読んできた。したがって、フランクルの「超意味」に関する言

説は、宗教の立場にある者にとってのみ必要なものであって、哲学の立場にある者にとっては切り離してもよいもの、いわば括弧にいれておくべき事柄である、という観点で考察を進めてきた。これはあくまでも個人的な思考の傾向ではあるが、一神教的文化背景をほとんど持たない現代の日本においては、フランクルのテキストに対する、ある程度一般的な姿勢でもあるのではないかと思われる。

けれども、「態度価値の自己超越の相関者は何か」という素朴な疑問を突き詰めていくうちに、超意味の問題は、決してなおざりにしてはならない問題であるように思われてきた。態度価値を、超意味への信仰を含めた仕方で理解して初めて、人間はフランクルが言う「制約されざる人間」（der unbedingte Mensch）となるのだと言えるだろう。ただし、拙論における「超意味」「守護性」の概念の理解は、まだ充分だとは言えない。今後の課題としたい。

（本論文は「フランクルの『超意味』について」というタイトルで2008年度日本倫理学会の自由課題研究として発表した原稿に、加筆・修正をしたものである。）

文献

1）V.E. Frankl, *Ärztliche Seelsorge, Grundlagen der Logotherapie und Existenzanalyse*, zehnte ergänzte Auflage, Franz Deuticke, Wien, 1982, S.72.

2）「自己超越」はフランクルの思想におけるキーワードだが、自己中心という用語を彼が特に用いているわけではない。ただしここでは転回以前のあり方と、転回以後のあり方との違いを明確にするために、この語を用いることとする。

3）V.E.Frankl, *The will to meaning, Foundation and application of logotherapy*, expanded edition, a meridian book, the United States of America, p.50.

4）*ibid.*, pp.25-26.

5）cf., *ibid*, pp.54-56.「意味」は唯一性を持つ人間と、状況の独自性のいわば交点として生じると考えられているので、意味はその本質から言って独自である。したがって意味を一般的な仕方で語ることはできないが、人々の意味体験のありようを類型化することはできる。こうして導き出されたのが、三つの価値のカテゴリーである。

6）V.E.Frankl, *Der Leidende Mensch: Anthropologische Grundlagen der Psychotherapie*, Verlag Hans Huber, Bern, 1984, S.202-203.

7）*ibid.*, S.203.

8）Vgl., V.E. Frankl, *Ärztliche Seelsorge*, S.60.「したがってまた、喜びに対しても人間は『義務づけられて』ありうるのである。この意味で、路面電車に乗っていて、美しい夕焼けを目撃したり、あるいは、ちょうど満開のアカシアの香りに気づいたりした人が、この可能な自然体験に没頭せずに新聞を読み続けるならば、彼はそのような瞬間に何らかの仕方で『義務を忘れている』と言いうるだろう。」

9）V.E.Frankl, *Der leidende Mensch*, S.203.

10）*ibid.*, S.203

11）V.E. Frankl, *Ärztliche Seelsorge*, S.114.

12）Vgl., V.E.Frankl, *Der Wille zum Sinn: Ausgewählte Vorträge über Logotherapie*, Piper, München, 1991, S.11. フランクルは実存的空虚の典型的な一例として、彼宛に送られてきた手紙の内容を紹介している。「私は二十二歳です。学位を取得し、デラックスな自動車を持ち、経済的に保障されています。その上、持て余すほど多くの『セックス』と権力が私の意のままになっています。ただ私はどうしても疑問に思わずにはいられないのです。一体それらすべてにどういう意味があるのだろうか、と。」

13）Vgl., V.E.Frankl, *Der leidende Mensch*, S.225.「絶望している人は、まさに絶望していることによって、自分が何かを偶像化していることを密か

に告げているのだと敢えて主張したいと思う。その人は、絶望していることによって、制約された価値しかないもの、相対的な価値しかないものを絶対的な価値へと絶対化していることを密かに告げているのである。」

14）Vgl., *ibid.*, S.212-14.

15）Vgl., *ibid.*, S.207. 「というのも、ここではシャベルですくう以外のどのような創造が、また殴打・飢え・寒さ以外のどのような体験が可能だっただろうか」。

16）*ibid.*, S.208.

17）V.E.Frankl, *Ein Psycholog erlebt das Konzentlationslager*, zweite Auflag, Jugend und Volk, Wien, 1947, S.111-112.

18）この二人の人物の場合を、フランクルは人生の意味への問に関するコペルニクス的転回を説明する文脈で語るだけであるので、態度価値と位置づけるのか、それとも創造価値や体験価値と位置づけるのかは、解釈の別れるところであろう。筆者は、この二人の人物の場合を態度価値と位置づける解釈を採用する。何かのために現在の苦悩に耐えるという点に態度価値の特徴を見るからである。その場合、後に見るように態度価値にはある種の幅が生まれることになると思われる。

19）V.E.Frankl, *Der leidende Mensch*, S.209.

20）V.E.Frankl, *...trotzdem ja zum Leben sagen, drei Vorträge*, Franz Deuticke, Wien, 1946, S.62-63.

21）V.E.Frankl, *Der leidende Mensch*, S.200-201.

22）V.E.Frankl, *...trotzdem ja zum Leben sagen*, S.63.

23）それはたとえば、死後はすべてが消滅してしまって、何もない世界が広がっていると想像し、あるいはまた一方で天国や地獄といった明確な世界があると想像したりすることの誤謬と同質のものである。前者は、無を存在化してしまっているし、後者は、存在の世界の対立概念であるはずの死を、天国や地獄として、やはり存在化して想起しているからである。

24）V.E. Frankl, *Der Wille zum Sinn*, S.63-64.

25）*ibid.*, S.73-74.

26）*ibid.*, S.62.

27）*ibid.*, S.69-70.